

学内広報

2013.6.24

no.1440



インターメディアテク2階/3階常設展示風景 © インターメディアテク
空間・展示デザイン © UMUT works 2013

東京大学の新しい学術文化総合ミュージアム

インターメディアテクに行ってみた！

新連載

『留学生さんいらっしゃい!』スタート

東京大学の新しい学術文化総合ミュージアム

インターメディアテクに行ってみた!

T (46歳・♂) ● 制服姿のスタッフさんの会釈に迎えられながらエントランスを入ると、まず見えてくるのは、白い床と壁と天井でできた広い空間。中央に何やら巨大な卵があって、思わずなでなでしたくなるね!

F (31歳・♀) ● 館内の展示物に触れてはいけません。

T ● 触れずに進むと、そこには透明な半球ケースが。覗きこんでみると4mm程度の白い物体が鎮座していた。大きめのホコリだろうか!

F ● 違います。これは微小貝の乾燥標本。鹿児島で採ったテンジククダマキ類の一種です。実は、ケースから顔を上げると見える壁と同じ貝の拡大写真があって、そこに説明が書いてありました。実物の貝と拡大された貝が一つのつながりとして感じられる仕掛けです。さっき館の人に教えられて気付いたんですけど。
T ● なるほど。毛利衛さんがスペースシャトル内で細胞を顕微鏡で覗いている最中にふと顔を上げたら窓の外に地球が見えて、細胞と地球が同じだと直感したっていう有名な話があるけど、それと近い感じだな!

F ● ちょっと違うと思います。でも、探せば見えてくるかもしれない仕掛けが他にもいろいろ施されているのは確かですよ。掛図の角度とか、動

魚眼レンズの覗き穴

医学部講堂の階段教室

十四人面金冠

五面ジャガー金冠

第二代東大総長銅像

※●●●は広報課のTとFが見かけた膨大な数の展示物のほんの一例です

エジプト神官のミイラ

血管注射したカメの解剖図

1957年に死亡したキョン

マーラ

ライオンタマリン

直径33cmのエピオルニス卵殻

ガー頭部解剖図

パン

ケリ属の一種

ヒミズ

ラミダス原人の右上顎三大臼歯と木彫人頭骨

ホルス像

黄金比のフレーム

ノミ絵図

ウシ胃模型

ゴホウラ(護法螺)

身長より大きい巨大地球儀

眼病標本

1902年に死亡した双頭カメの写真

大澤岳太郎教授のデスマスク

19世紀末のドイツ製人体模型

巨人症エックス線写真

首長の像

約288カラットの巨大ダイヤモンド模型

世界最大金塊

学名にゲーテの名を冠した鉱物

ニンニク臭がある鉱物

長崎浦上天主堂の被爆標本

笑顔の火星クレーター

最初の弥生式土器

郵便局の窓枠製写真額縁

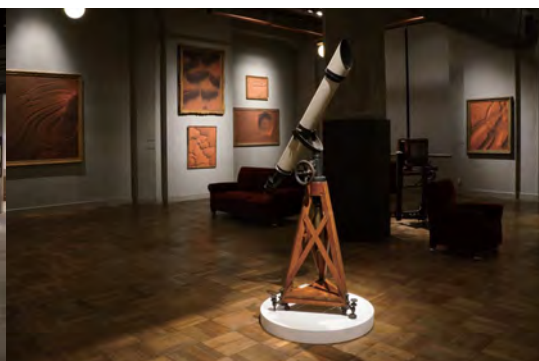
郵便局の時計の針

マチカネワニ

日英博覧会大賞の賞状



特別展示「インターメディアテク建設」会場風景



特別展示「コスモグラフィア」会場風景



常設展示内ミンククジラ骨格標本

2013年春、「インターメディアテク」(IMT)という名を冠した、東京大学の新しいミュージアムが誕生しました。

日本郵便と総合研究博物館の協働で生まれたこの館には、東大が蓄積に蓄積を重ねてきた膨大な量の学術文化財が展示されています。これまでの博物館とはひと味違う新文化活動拠点の姿を、広報課員のお気楽な体験レポートと西野館長の真摯なインタビューをとおして想像してみてください。



常設展示内の
リデザインされた
壁面展示棚

空間・展示デザイン
© UMUT works 2013

ワイマール
共和国の
5億マルク
紙幣

大日本
零円札発行
所の零円札
(本物)

工科大学
備品番号
「いの一号」

パラメータ
族の放物線が
含まれた極小
曲面の幾何学
関数実体模型

ショックダイ
オオコンニャク
拡大写真

ヨナグニ
サン

『鳥の飛翔
に関する
手稿』

西山油田
原油
サンプル

東京スカイ
ツリー用銅管
カット
サンプル

1867年の
徳川慶喜

秋篠寺乾漆
心木模刻

クーズー
の角

遠近法
実体模型

ナナフシ

カット
スピード
メーター

ヘチマ

モア科
卵殻化石

白金モデル

木製の結晶
形態模型

徳川式定制
作船型模型

宝石珊瑚

東天紅

八木戸

蓑曳

ブルキナ
ファソ・
モン族の長大
マスク

井口式特許
自在つがり

数理模型に
触発された
服

土佐長尾鶏
(土佐のオナ
ガドリ)

ハートカム

ねじ

腹皮
など

ヒマラヤの
植物標本

刺青標本
保存用額縁

モダマ豆類
乾燥標本

ミンク
クジラ

微小貝
乾燥標本

微小貝
超拡大写真

タコノキ

ゴバンノ
アシ

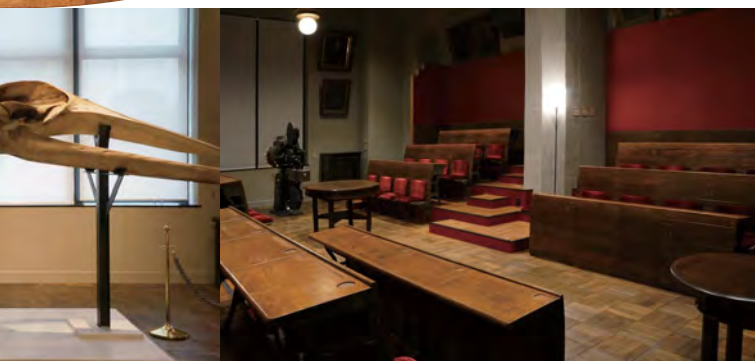
物の骨格を納めた枠組みに隠された黄金比とか、古代ローマの建築意匠を活かした台座とか。いちいち説明するのは野暮ですが、そういう楽しみ方もできる館なのです。

T●そのレベルになると一庶民にはついていけないが、個人的に感激したのは超インフレ紙幣の近くに置かれた零円札(本物)。あの赤瀬川原平作品を隠し味風にまぜてくるとは、IMTおそろべし!

F●私が気になったのは、扇を広げたように見えるウミカラムツツという海の動物の標本と、工科大学時代の古い什器につけられた「いの一号」の備品番号ですね。昔から大学の備品にはこうやって一つ一つ番号が振られていたのかと思うと、しみじみします。

T●教授のデスマスクとか、夜中に見たらびっくりしそうな眼病標本とか、刺青の皮膚を保存した紙とか、好事家垂涎の医学系展示物は一度見たら忘却不能。マチカネワニにタコノキにゴバンノアシにキョンにバンにガーなど、名前だけで気になる動植物も大集合。館長が「悔いはない」と断言したIMTクオリティーは、誰でも無料で体感可能。見逃す手はないのだ!

F●見逃す手はないのです。



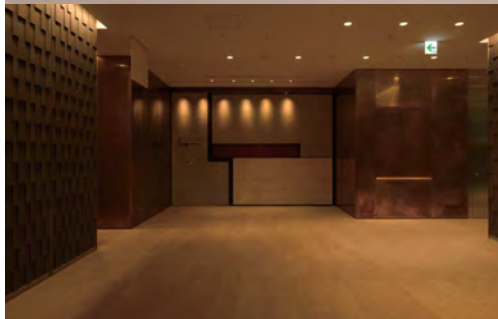
アカデミア内観(医学部講堂の階段教室)



常設展示内生薬標本および鳥類図譜

© インターメディアテク

ホワイエ展示風景



正面入口



3階常設展示風景

空間・展示デザイン © UMUT works 2013

インターメディアテクの西野館長に聞いてみた!

インターメディアテク 館長
総合研究博物館 館長

西野 嘉章

1952年生まれ。東京大学総合研究博物館教授。専門は博物館工学・美術史学。「アート&サイエンス」をテーマの一つに掲げて活動中。著書に、博物館工学三部作『博物館学』『大学博物館』『二十一世紀博物館』（東京大学出版会）、『チェコ・アヴァンギャルド』（平凡社）、『モバイルミュージアム』（平凡社新書）などがある。

3世紀にまたがる時代を架橋する館

インターメディアテク（IMT）では、東大が創学以来蓄積してきた学術遺産を展示しています。学術遺産を一般の方に見ていただくのが基本的な企図ですが、過去に向かうだけでなく、未来への志向を意識しています。19世紀から21世紀まで、3世紀にまたがる時代を架橋する。それが根底にある狙いです。

ですから、扱うのは過去の遺産だけではありません。NASAの火星画像、ラムダス星人、ペルーの金冠……と、最先端の研究成果も並んでいます。ただ、そこにレトロな雰囲気を加えてある。たとえば子供科学館で火星を見せるのとは違うやり方を採っています。現代では「子供でもわかるよう噛み砕いて説明しろ」などといわれますが、大学の博物館として、そういうやり方は採りませんでした。

古いものを蘇らせるにはデザインが重要との思いから、心がけたのはデザイン重視のミ

ュージウムです。つまり、言語のコミュニケーションに頼らず、目でわかるようにすること。IMTでは展示の説明を長々とはつけていません。言葉より視覚で腑に落ちる。そういう手法を採用しているのが大きな特徴です。

もうひとつの特徴は外注をしないということ。グラフィックも展示什器も内装も家具のデザインも、ほぼ自分たちで手掛けています。剥製士、修復士、大工、金属工……。この研究者は教員であると同時に職人でもある。そんな博物館はなかなかないはずです。ほとんどの展示什器は学内の不要物をリデザインしたもの。古い什器でも脚に台をつけて嵩上げすると立派に使えます。そうすることで、遺産の継承だけでなく、市販品にない独特のテイストを加えることができる。資源やエネルギーの消費を抑えることもできるのです。

以前から私たちは既存の資源を現代のニーズに応える形でどう再利用するかを追求してきました。各部局から出る不用品を集め、関

2 階常設展示風景



常設展示内のリデザインされた壁面展示棚



正面扉

© インターメディアテク

東一円に6〜7か所の倉庫を借りてひたすら保管してきました。ゴミ問題、エコロジー、資源問題などに対する博物館側としての解答は、既存のものをリデザインして活用すること。その集大成がここにはあります。

説明せずとも感じられる世界がある

たとえば、常設展示内の壁面展示棚の扉は、法学部2号館の教授室にあった書架の扉です。建物の改修で廃棄されると聞き、80面ほどもらってきました。扉を天地逆さに重ねると菱形のいいモチーフができると気づき、大キャビネットに仕立てました。同じものを新しく作ろうと思ったら莫大な費用がかかります。

そんなことはいちいち来館者に説明しませんが、説明されなくても、見たことのない世界であることは間違いなく感じられるはずです。普段のっぺりした現代建築の中で暮らしている人がこの棚の前にきたら、普段と違うクラシカルでオーセンティックな雰囲気を、新建材でそれらしく作ったものとは明らかに

違う質感を、必ずや感じることでしょう。

学術標本も同様です。大学は非常に専門化されていますから、特定分野で役立たないとされた資料が、別の分野ではおもしろい資料になることがある。たとえば、植物学者が不要で捨てた標本乾燥用の新聞紙が、人文系研究者には保存状態のいい文字資料になったりするのです。ある分野で役立たないとされた標本を、別分野にシフトすることで再び役立たせる。これもリデザインの例です。

こうしたものの集大成が、この丸の内という場所にできたというのは、実はかなりスパイシーなことではないかと思うのです。

開館から2カ月。おかげさまで予想以上の人々に来館いただいています。ビジネスマンが多いのかと予想しましたが、思ったより中高年の皆さんが多い印象です。中高年の方が一息つけるような場所がやっとできたということなのかもしれませんが、中長期的には、次世代を担う若い人たちにこそ、見て「おおっ！」と驚いてほしいなと思っています。

インターメディアテク

〒100-7003 東京都千代田区丸の内2-7-2 JPタワー2-3F
JR東京駅徒歩1分／丸ノ内線東京駅地下道より直結
開館時間：11時～18時（木・金は20時まで）※入館は閉館時間の30分前まで
休館日：月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日休館）・年末年始・その他館が定める日
入館料：無料
問い合わせ：03-5777-8600（ハローダイヤル）

いま見られる特別展示

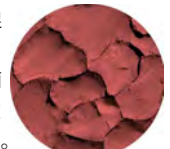
1. インターメディアテク建設

旧東京中央郵便局舎を継承・転生させて館ができるまで。



2. コスモグラフィア（宇宙誌）

探査機が捉えた惑星の素顔を絵画のように鑑賞する試み。



3. アントロポメトリア（人体測定）

モードと数学が会うことから生まれた様々な姿かたち。



4. ケ・ブランリ・トゥキョウ

フランスのケ・ブランリ博物館とIMT間に架橋する企て。



協力：総合研究博物館 制作：本部広報課

ひょうたん島通信

大槌発! 第14回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

コケムシを調べて大槌の海を知る

広瀬 雅人

大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター・東北マリンサイエンス拠点形成事業 特任助教

みなさまは、コケムシという生き物をご存じでしょうか。「コケ（苔）」でもなければ「ムシ（昆虫）」でもありません。たとえば魚市場や宴の席で、牡蠣の殻や昆布の表面に付着したザラザラした硬い苔のようなものを目にすることがある人は多いかもしれません（写真A-D）。あれがコケムシです。苔のように見えるものはコケムシの群体で、実際には体長1mmもない個虫がたくさん集まっています。コケムシは、個虫の触手に生えた繊毛で水流を起こして水中の微生物を食べる歴とした動物なのです。苔のように見えることからこの名で呼ばれていますが、その群体の形態は多種多様で、中にはサンゴのように大きく成長し、サンゴ礁ならぬコケムシ礁を形成するものも知られています。しかし、そのような大規模なコケムシ群集は現生の海では世界的にもほとんど知られていませんでした。ところが、大槌湾にはその世界的にも珍しい大規模なコケムシ群集が存在する可能性があるのです。

私の大槌での研究は、巨大なコケムシ標本との出会いから始まりました。知人

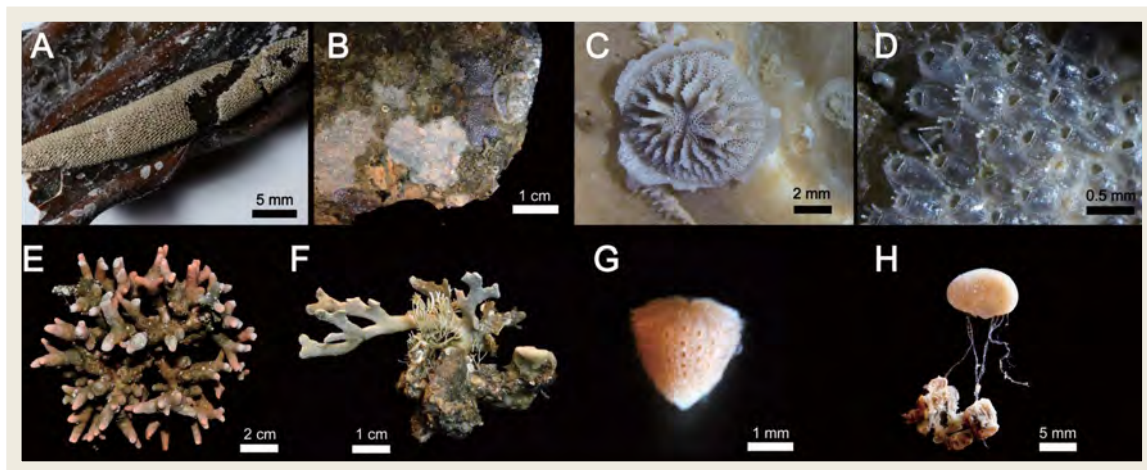
から偶然、大槌の刺し網漁であがってきた枝状のコケムシ（写真E, F）をいただいたのです。そのときから、大槌は私の憧れの地となりました。2009年4月に初めて大槌を訪れてから、私は2年間にわたって4月と7月に大槌でドレッジ（底曳き網）や潜水による調査を行い、多数のコケムシを採集しました。2010年には、当時は南方種と言われていたスナツブコケムシという数mmの小さなコケムシ（写真G, H）を大槌沖で発見しました。

4月末の調査の時期には毎年、近くの港でひょうたん島にちなんだ「ひょっこりひょうたん島まつり」が開催されており、昼休みにには出店巡りや虎舞の鑑賞もしました。お祭りを締めくくる餅投げで、餅に紛れて飛んできた地元の「塩蔵わかめ」をもらったことも良い思い出となっています。

地元の方々からの標本提供にも助けられ、2年間の調査で大槌湾口部の岩礁域に大規模なコケムシ群集が形成されていることも明らかとなりました。そして3年目に入り、いよいよ湾口部で詳細な調査を行おうとしていた矢先、東日本大震

災が大槌を襲ったのです。震災の1年後に調査で大槌を訪問した際、変わり果てたその姿に胸を締め付けられる思いがしました。しかし、温かく前向きな大槌の人々に自分の方が逆に元気づけられたように感じました。

私は現在、毎月2週間ほど大槌に滞在しています。刺し網漁を再開した方から再びコケムシをいただくことができたので、震災前後のコケムシの成長速度の比較や、コケムシの骨格に残された震災の記録を探索する研究にも着手しています。コケムシを調べることで、海底における震災の影響を過去にさかのぼって知ることができるかもしれません。また、これと併せて大槌湾内各地で付着生物の調査も行っています。コケムシなどの付着生物はこれまで研究者もほとんど注目してこなかった動物たちですが、それらがつくる群集は他の生物に生息場を提供するとともに、重要な餌資源にもなっていると考えられています。今後、付着生物の湾内における分布や生態を詳細に明らかにすることで、良好な漁場の再生や資源管理にも貢献できればと考えています。



大槌とその近海で得られた様々なコケムシ A. 三陸産の昆布に付着したコケムシ、B. 岩に付着した被覆性のコケムシ群体、C. 牡蠣の殻に付着したハナザラコケムシの仲間、D. 牡蠣の殻に付着したウスコケムシの仲間の顕微鏡写真、E. コブコケムシの仲間、F. ツノコケムシの仲間、G. スナツブコケムシの仲間、H. スナツブコケムシの仲間

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第2回

黒野 優菜

渉外本部パーソナル渉外グループ
渉外・基金課 一般職員

職員だけ!? 『営業』しています

大学への寄附というと、企業からの寄附講座や研究助成などがおなじみかと思います。しかし東大には個人からの寄附もとても多いのです! そんな東大をサポートしてくれる方々を増やすべく、職員が資料を持って個人の方を訪問し、寄附のお願いをしています。東大に「営業」担当の職員がいるなんて、実はあまり知られていないのでは?

2012年度の東大基金の実績は、11,142件・約13億円の寄附申込のうち、10,984件・約6億円が個人からの寄附です。東大創立130周年記念に合わせて渉外本部が行った「東大130キャンペーン」以後は、申込金額の約半分は個人からの寄附が占めています。中には毎月、毎年、と定期的に寄附をして下さっている方も。年間1万件もの寄附を頂けるというのは、東大に寄せられている期待の大きさを感じます。

さて「営業活動」の中身はというと、卒業生の方を中心に、東大の取り組みに関心を持って頂ける方へ電話やお手紙等でアポイントを取るところからはじまります。“東大の職員が来る”ということで秋入学の質問などを逆に受けることも。そのような大学への「関心」を具体的な「期待」「支援」に変えるためには、マスの広報のみならず、面会してのコミュニケーションが重要なので、渉外本部は日々営業活動を行っています。

渉外をしていて特に嬉しいのは、大学への応援の言葉を頂いたときです。寄附への御礼のお手紙に「新聞で東大の研究チームの被災地支援の活動を見た。これからも頑張ってください」「東大に寄附するけれど、日本のためでもあります」などの御返事の言葉を頂いた時はとても感激しました。このような支援者の方と東大をつなぐ架け橋となれればと思います。

今回は、法人営業を担当する、コーポレート渉外グループから!



渉外本部のメンバー。
ボードに訪問先と帰学時間は必須!

東京大学基金事務局

TEL 03-5841-1217 : E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp
内線21217 : URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/

留学生さん いらっしやい!

第1回

海を越えて東大に来た学生に聞きました。



マケドニア

アンドレア・
トラコフスカさん

Andrea Trajkovska

工学系研究科建築学専攻
修士1年

首都・スコピエの出身。昨年10月に来日し、隈研吾研究室へ。「朝から夜中までは研究室の中で暮らしています…」。

Q. どうして日本に来たんですか?



自然との調和をよとする日本のカルチャー、特に建築に興味があったからです。たとえば、京都の青蓮院のように、外の庭園と建物の内側を廊下という中間の空間でひとつなぎにする工夫など、実にアメイジングだと思います。

Q. ではどうして東大を選んだんですか?

建築の分野で世界のベスト5に入る大学で学びたかったのと、あとは日本で10年間暮らしたことがある友人が薦めてくれたからです。



Q. いま研究しているのはどんなこと?



小淵祐介先生のラボで「デジタル・ファブリケーション」(PCと連動した成型技術)を用いる設計を学んでいます。大林組との協働でバビリオンを製作中で秋には完成の予定です。

Q. 東大に来て困ったことはありますか?

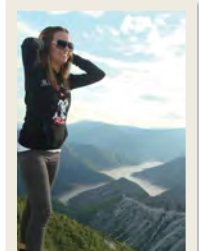
皆さん親切なので、全然問題ありません。ただ、ランチの後にゆっくり外でコーヒーを飲みながらおしゃべりする習慣がないのは少し残念。地中海の辺りだと、それがリフレッシュの定番、という側面があったのですが……。



Q. マケドニアの自慢を教えてください!



世界遺産のオフリド湖がきれいでお薦め。魚がおいしいし、真珠の産地としても有名(ただし写真はコジャクという場所)。あと、ハンドボールが盛んで、特に女子が強いですよ。



協力: 国際センター本郷オフィス 制作: 本部広報課

※ご本人が英語で話した言葉を本部広報課が日本語に訳して掲載しています。

ワタシのオシゴト 第88回

RELAY COLUMN

社会科学研究所 総務チーム(研究協力担当) 須藤 新

社会科学研究所の所掌範囲について



自分に似ている?というキャラクターと一緒に

社会科学研究所研究協力担当の須藤と申します。今回福田さんよりご連絡があった際、前職と後任という仕事における長幼の關係に従い謹んでご依頼を承りました。

研究協力担当の所掌は、主に科学研究費補助金や奨学寄附金をはじめとする外部資金の受入れ、和文の研究紀要である「社会科学研究」等刊行物の編集刊行、そして客員教授(特任教授)受入等、国際研究交流に係る事務に分けることができます。

担当名が大変広い定義を持つため、各研究科でも担当所掌が異なることが多いのですが、社会科学研究所研究協力担当の業務は系統的に整理されているため、研究協力担当業務について鳥瞰的にみることができ、貴重な経験をさせていただいている旨実感しております。新しい研究事業が登場するたびに、いつもわくわくしています。今後ともよろしくお願いいたします。



撮影は財務ご担当の古屋慎一郎さんです

得意ワザ: 大部屋でも内線知らずの音量(すみません)

自分の性格: 机の上をきれいにすべく営々と努力しているのですが...

次回執筆者のご指名: 森田美由紀様

次回執筆者との関係: 前任地の同僚です

次回執筆者の紹介: いつもいつも元気を頂いています

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第91回

SanRen対談 vol.2

「産学連携本部発、“大学力”の活かし方」

産学連携本部の保立和夫本部長と、イノベーション推進部の各務茂夫本部長による対談の2回目。今回はイノベーションや多様性について伺います。

各務 優れた技術であっても社会との連携の仕方によっては実装できるに十分ではない形で連携してしまうと、イノベーションはなかなか起こってきません。海外の企業も含めて本学の研究成果が社会に広がっていくような展開を捉えたいですね。研究成果がなかなか社会実装できない場合は、ベンチャー企業で研究成果を活かしていくケースもあるでしょう。

保立 社会の要請に応じて大学が動き出す産学連携もありますが、逆に社会がまったく気づいていないようなアイデア・技術と社会とをコラボレートしていくこともあるわけで、リサーチユニバーシティとして世の中にこれまでなかったモノを使って社会を変えていくところにある程度の重きを置き、意識して研究するべきではないかと思うんですね。

各務 たとえばMITでは、研究成果をそのままにしておくのではなくて、優れた研究成果を社会で役立たせる視点から、学生がビジネスプランを作成する件数が増えているんです。そして、「つなぎ」ともいえる企業とのキャッチボールが始まるのですが、こういったことを本学でも促進したらどうかと考えています。

保立 本当の意味で多様性まで組み込んだ、社会を動かすような人材構成で企業は学生を雇っているのか、あるいは大学は全体として見たときの人材を送り出しているのかと考えることがあります。ひたすら興味の赴くままに研究に没頭する研究者こそ大事であって、そして力を貸してもらうようなやりとりやプロセスこそ、当本部が実践すべきことのひとつなのではないかと考えています。



各務イノベーション推進部長(左)と保立産学連携本部長

全文はコチラ! <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/jp/information/crossroad/index.html>

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・ バイブル

第71回

総合文化研究科 准教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

廣野 喜幸

なぜだろう、なぜかしら ダイ・ハード編

小学理科の読本『なぜだろう、なぜかしら』シリーズについて、これまで3回(3年!)にわたり触れてきた。1955-56年に出版された同シリーズは、小学生から集めた質問に答える「ニーズ先行+広く浅く」方式をうみだし、半世紀に及ぶロング・セラーとなった。1977年には、手塚プロ協力のもと、ビジュアル化もなされた。だが、1997年以降品切重版未定が続き、命運尽きかけた感が強い。そこで、私の仮説は「ニーズ先行+広く浅く+ビジュアル方式も賞味期限が切れた」となる。『なぜだろう、なぜかしら』シリーズにオマージュを捧げ、科学技術コミュニケーションを志す若人に、「理科読本の新機軸を考案せよ!」と檄を飛ばす「なぜだろう、なぜかしら レクイエム編」が、前回執筆時(2012年6月)における今回の構想であった。

近ごろの院生諸君は、さすがに自分のテーマについては頑張っているが、そこから一步でも踏み出す領域は敬して遠ざける。もっと広い視野をもつ必要があるのではないか。常々こう語っているのは誰だ。私である。レクイエム編構想に対し、視野狭窄に陥っているのではないかと自省の念がわきあがる。1例から仮説を引き出して済ませている点が気になる。「なぜだろう、なぜかしら」とつらつら考えてみたところ、臆気な光景が浮かび上がってきた。そうそう、類書が横に並んでいたなあ。同様のシリーズがあったとすれば、その消長はどうなっているのだろう。他シリーズも品切重版未定状態が続いていたとしたら、廣野仮説も確からしさを増すのではあるまいか。

調べてみると、1957年には『理科なぜどうして』、1968年には『なぜなに理科』、1973年には『理科のひみつ』、2011年には『たのしい! 科学のふしぎ なぜ? どうして?』各シリーズが刊行されている。『理科なぜどうして』は、1989・2002年の二回改訂され、『理科のひみつ』は『なぜ? どうして? 科学のお話』と改称され、2009-11年に最新版が刊行されている。あれま。盛況を呈しているではありませんか。じゃあ、元祖『なぜだろう、なぜかしら』はなんで品切重版未定なんだ? 不思議に思っていたところ、ついに出ました新シリーズ(2012年12月)。仮説が潰えた落胆もなんのその、子供のために(と称していそいそと)買ってみました。そのご報告についてはまた次回。再見!

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・ 復興支援室 より

第25回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、
遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(5月~8月)

5月~6月	福島県相馬市「寺子屋・相馬育英館」 学習支援ボランティア
5月30日	登録プロジェクト更新(新規3件)
6月4日	救援・復興支援室会議
6月~7月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」 学習支援ボランティア
7月~8月	福島県相馬市「寺子屋・相馬育英館」 学習支援ボランティア

遠野分室ものがたり

本部企画課係長(遠野分室勤務)

文: 赤崎 公一

「足と宿と・・・」。

被災地での活動で、必要不可欠なものと言えば「効率的な移動手段(車両)」と「宿泊先」です。

2時間に1本の鉄道利用後、1時間に1本のバス移動では、効率的な活動は困難です。宿泊先も少しずつ増えています。復興が進むにつれ工事関係者が多く利用することとなり、確保が困難な状況です。

後方支援拠点である「遠野東大センター(TTC)」は、宿泊機能も有しており、開所後2年弱で延べ約1,500人*の教職員・学生に利用されています。車両も貸出用を含め3台配備しており、延べ走行距離は3.5万km*を突破。5月からは、釜石駅近くに貸出車両を配備し、後方支援体制を強化しました。(※2013年5月末現在)

もう一つ、重要で必要不可欠なもの・・・「信頼関係」。被災地で信頼を得るには、数多く顔を合わせ、腹を割って話せるかがポイントとの事(地元住民談)。

遠野東大センター利用(無償)は、1度の出張コストで2度出張できることから、被災地での信頼関係構築への後方支援も担っているのではないかと思います。

利用学生談「自分の家より快適です・・・」

どんどはれ・・・



遠野東大センターの様子

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html

Email: kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

内線: 21750 (本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとして簡単にご紹介します。それぞれの記事の詳細は、全学ホームページよりご覧ください。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
5月22日	産学連携本部	「Boeing Higher Education Program」に参加	4月26日
5月24日	本部研究推進課	RU11「日本の国際競争力強化に研究大学が貢献するために（提言）」記者会見を開催	5月22日
5月24日	本部学生支援課	第86回五月祭を開催しました	5月18・19日
5月29日	本部留学生・外国人研究者支援課	「東京大学フェロシップ」受給者証書授与式を開催	5月23日
6月5日	低温センター	平成25年度低温センター安全講習会（第一回・第二回）開催	4月23日～5月10日
6月7日	大学院教育学研究科・教育学部	教育学部附属中等教育学校で新しい体育施設の落成記念式典を挙行	5月29日
6月13日	大学院教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生懇談会の開催	5月22日
6月13日	広報室	東京大学史関係資料が重要文化財に指定されます	2月27日
6月14日	渉外本部	「平成25年度 東京大学さつき会奨学金受給者証書授与式」を開催	5月24日
6月18日	大学院総合文化研究科・教養学部	ジョン・V・ルース駐日米国大使の講演会が開催されました	6月10日

(5月17日～6月18日掲載分)

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているさまざまなお知らせを一部掲載いたします。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
5月21日	広報室	渡辺裕教授・大政謙次教授・河口洋一郎教授が本年春の紫綬褒章を受章	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/512/
6月1日	本部人事給与課	人事異動（教員）	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動（教員）
6月5日	本部学務課	平成25年5月1日現在の学生数について	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/582/



CLOSE UP



笑顔で講演するルース大使

ジョン・V・ルース駐日米国大使の講演会が開催されました (大学院総合文化研究科・教養学部)

6月10日(月)15時より、駒場キャンパスの数理科学研究科大講義室において、ジョン・V・ルース駐日米国大使の新生歓迎講演会が開催されました。本学教養学部の前期課程学生を中心に、教職員を含め約200名が会場を埋めました。大きな拍手に迎えられ登壇したジョン・V・ルース氏は、「グローバル時代のアメリカ合衆国と日本」という演題で講演し、グローバル化が急激に進展し、競争が激しくなっている今日の世界では、グローバルに考え行動できることが重要になっていると語りました。そのために、

若いうちから積極的に海外に出て学び、想像を超えるような体験を積んで自分を磨き、世界で活躍していく起業家精神を育んでほしいと本学の若者たちへエールを送りました。

講演後の質疑応答では、20名近くの学生が皆英語で質問し、大使はユーモアも交えつつ丁寧に答えられました。予定時間を30分以上も延長した講演会の最後には、学生全員とルース大使との記念撮影が行われ、講演会は盛況のうちに終了しました。



CLOSE UP

RU11「日本の国際競争力強化に研究大学が貢献するために（提言）」記者会見を開催（本部研究推進課）



提言を行う濱田総長



幹事校3総長による記者会見光景

我が国における先端の研究・人材育成を担う大学であるRU11（北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学、東京工業大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学の11大学で構成）は、5月22日（水）の幹事校による記者会見にて、本学濱田純一総長、早稲田大学鎌田薫総長、京都大学松本紘総長から、日本の国際競争力強化に研究大学が貢献するために提言を行いました。

濱田総長は、「研究に重点を置いて進めている国立大学・私立大学の強い国際競争力が問われているときに、その基盤となる国からの資金が非常に苦しい状況になっている。つまりそれは、「経営」の融通が利かなくなっているということ。直接経費に関する規制を緩和して、更に間接経費の割合を増やすことによる手当てが必要。」と、

基盤となる経費の重要性について語りました。

<提言>

日本の国際競争力強化に今後も研究大学が貢献するために少なくとも、以下の2つの取り組みが必要

- ・競争的資金を含む、国の全ての研究・教育補助金・委託費における間接経費率の最低30%の実現（実質化）
- ・基盤的経費（国立大学法人運営費交付金・私立大学等経常費補助金）の削減停止・充実

詳細は、以下のRU11(学術研究懇談会)ホームページに掲載しています。

<http://www.ru11.jp/blog/2013/05/22/539/>



CLOSE UP

第86回五月祭を開催しました（本部学生支援課）



安田講堂前ステージの様子

本学の学園祭の一つで、今年で86回を迎える五月祭が、好天に恵まれた5月18日（土）、19日（日）に、本郷キャンパスと弥生キャンパスで開催されました。

アカデミックな雰囲気のキャンパスは、色とりどりのテントや看板であふれ、約11万5千人の来場者の熱気に包まれました。

今年のテーマである「aMayzing!」にふさわしく、様々な場所で、ダンスや演奏、アート等のパフォーマンスが行われ、道行く人は足を止めて楽しみました。また、各学部の建物内でも、研究やサークル活動のハイレベルな展示や、参加型の実験などが行われ、大いに賑わいました。

ご来場いただいた皆様、ありがとうございました。11月22～24日に開催される駒場祭や、

来年の五月祭もどうぞよろしくお願い致します。

駒場祭ホームページ：

<http://www.a103.net/komabasai/>

五月祭ホームページ：

<http://www.a103.net/may/>



本年もたくさんの来場者で賑わいました

春の紫綬褒章受章（広報室）

渡辺裕教授（人文社会系研究科）、大政謙次教授（農学生命科学研究科）、河口洋一郎教授（情報学環）が、本年春の紫綬褒章を受章いたしました。

受章記事は左記「お知らせ」のURLをご覧ください。



CLOSE UP



ヘレン・ケラー来日時の文書(史料室)

東京大学史関係資料が重要文化財に指定されます（広報室）

東京大学史料室と総合図書館において保管されている「東京大学史関係資料」1,093点が、大学史の歴史資料としては初めて、2月27日（水）に文化審議会文化財分科会の議決を得て、重要文化財に指定されることになりました。近代日本の大学史に関し、「東京大学史関係資料」のなかの文書によってのみ知り得る情報も少なくありません。本学では、研究資料として国際的にも広く永続的に活用されるよう保存と利用の整備を進めています。詳しくは本学ホームページ「トピックス」をご覧ください。



多様性(それから校舎への注文)

法学部を卒業してから、約25年ぶりに本学に戻ってきた。学生数220人程度のさほど大きくない公共政策大学院の教員となったのだ。龍岡門の近くの第二本部棟という古ぼけた建物を借りて教育・研究が行われている。私の研究室は、教務室や教室のすぐ近くにあり、公共政策大学院の生徒が私の部屋の前の廊下を毎日行き交っている。何気なしに聞いていると、日本語、片言の英語、本格的な英語、中国語、韓国語、ドイツ語、スペイン語、その他私の知らない色々な言語が聞こえてくる。在校生の既に30カ国・地域以上にわたり、授業の3割以上が英語、在校生は30%以上が外国人なのだそう。日本人学生も、英語の授業も取れるようになっている。

教え始めて驚いたのは、国籍、文化、人種、言語、それまでのキャリア、男女の違い等の多様性は、講義内の議論に爆発的なダイナミズムを生み出すことがあるということだ。

私は英語で政府開発援助などを教えている。日本の開発援助政策は、アジアから来ている学生はあまり疑問に思わないようだが、アフリカや南米出身の学生には大いに違和感があるようで質問が続出、するとすぐに反論が出

てきて、講義は混乱に陥り、私は、先生から、議事進行役に代わり、講義は脱線に脱線を重ねていく。授業は大幅に遅延していくが、色々な意見が出るので、そのコスモポリタンな雰囲気は大いに楽しんでいる。議論が白熱して、教室内の気温も上がるような気がする。多様性は、強烈なダイナミズムを生み出すのだ。

さて、そこで2つほど申し上げたい。まず、現在の日本人学生がリーダーとなって活躍する20年後、30年後は、日本はさらなるグローバル化の波にもみくちゃになっていることは間違いなく、大学としては前述のようなコスモポリタンな世界を提供することが、国家ひいては国民に対する義務ではないだろうかということ。次に、この古ぼけた校舎は何とかならないでしょうか。ハーバード大学のケネディスクールやプリンストン大学のウッドロー・ウィルソンスクールやシンガポールのリー・クアンユースクールと世界的に競争しているのに、この建物ではとても戦えません。

長谷川浩一

(大学院公共政策学連携研究部・教育部)